

日本都市論

上田篤著

三一書房 B 6 版 276頁

850円

都市計画への市民参加の必要性を説く

本書は、著者がここ数年各誌に発表した論文をまとめて一冊にしたものであり、「日本都市論」「空間の論理」「文化財の保存」「万国博の会場計画」「日本の土地問題」の5編からなっている。

著者は、そのあとがきで、「私なりの都市計画についての考えをまとめる必要にせまられたので、拙速のそしりを省みずあえて刊行する気になった。」と述べているが、それぞれの論文はテーマこそちがいが、一貫したペースのうえでのべられている。それは、日本の都市問題には、日本的な解決方法がとられなければならないという問題意識である。ロンドンのニュータウンが計画どおり建設されたのは、ロンドン周辺の土地はまったく不毛に近いものであり、都市と農村が隔絶したものとして形成されてきたからであり、都市と農村が連続しているわが国のように深刻な農業転換問題などは

おこらなかったからである。つまり日本は、歴史的にも、地理的にも西欧諸国とは異なっており、輸入都市計画技術をそのまま適用しても成功はおぼつかない。

そこで著者は、日本的な都市問題解決の具体策を積極的に提案している。

情報の集積化と、生活空間の分散化を同時にはかる手段として国中にはりめぐらされた「同時間交通帯」の建設と風土の多様化を活かすための「地域の風合い」の保存とにより、日本の国土全体を一つの都市とする「くに都市」の考え方がのべられている。これは、わが国のあるべき未来の一つの姿を示唆しているものといえよう。そして数多く考えられる未来のモデルの中から一つの未来を選択することが、今後の政治における重要な課題になってくる。もし人びとに対して直接未来の姿を、たとえばモデルであっても具体的に示すことができるようになれば、間接的な政治のやり方は再検討されるようになり、現代政治や政治家につきまとうさまざまな不明朗さが解消されていくことも期待される。さらにこの方法が徹底すれば、従来の代議制に代えて古来からの政治の理想である人びとが直接政策を選好する直接民主主義の実現も可能と

なってくるのである。

また新陳代謝の激しい日本の都市で、風土、伝統、国民性にマッチしたものを創造するためには、開発と保全の調整が不可欠であり、その一つのモデルとして万国博の会場計画が好個のものとしてとりあげられている。最後に土地問題に関連し、日本の都市計画のあり方にふれ、従来の「上からの都市計画」を市民の総意による市民参加の都市計画に変革することの必要性が強くのべられているが、これこそ現在の都市問題解決への第一歩であろう。

おくれればせながら、各党の都市政策要綱が発表され、また長い間の懸案であった都市計画法の改正が不十分ながら行なわれ、都市問題解決の機運が盛りあがりつつある時、本書は都市問題ひいては日本の現状を改めて考えなおさなければならないという気をおこさせてくれる。

<K.N>

あとがき

本号から、「調査季報」の編集は企画調整室でおこなうこととなりました。今後も都市問題、自治体問題の up-to-date なテーマをとりあげて、考えていきたいと思っています。猛暑の中をご執筆下さった諸先生に厚く御礼申しあげます。<N>

調査季報

18

1968年8月20日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22